B 125　被服色彩嗜好の主成分分析

東京家政学院短大　今井弥生

目的　色彩嗜好は人々が被服を選ぶときの条件となり、形態・素材とともに個人の人格、外的情報に影響される。このことは1967年の調査で明らかにしたが、14年を経過した現在、現代の女子学生は被服の色彩をどのような基準で選択したか、この問題についてH－otellngの主因子解でイメージ分析をおこない、被服構成色彩の推移を追求した。

方法　対象：母集団は東京家政学院短大学生90名、年齢18～19歳。素材購入目的と時期：被服構成実習で被験者のワンピース・ドレス製作のため1980年10月に購入。調査方法と分析：前回の質問紙を用い、'81年1月完成時点でドレスの色彩に対し、形容詞30項目、5段階評定させた。全被験者の評点平均、分散、標準偏差を求め、イメージ・プロフィール、相関行列、主成分分析で因子負荷量、固有値を求め、それぞれの位置関係に解釈を加え、1967年のデータと比較、検討した。

結果　ドレスのイメージ・プロフィールは単純な、無難な、落着いた、好きなが上位群、上品な、大人しいは中位群、繊細な、流行のが下位群であったが、'67年との差が認められた。各形容詞間の相関は、「個性的な、印象的な」「上品な、優雅な」「知的な、上品な」「好きな、似合った」は強い相関関係にある。因子負荷量で第1因子は美しい、知的な、似合った。第2因子は地味な、落着いた、堅実な。第3因子は清潔な、やわらかい、可愛らしい。累積寄与率　54%。第2、第3因子間の形容詞の位置関係は、'67年と類似点が認められ、被服色彩嗜好の選択時における基本的態度の構造から被験者をいくつかのタイプに分類することができた。さらに形態・素材の関係もわかった。